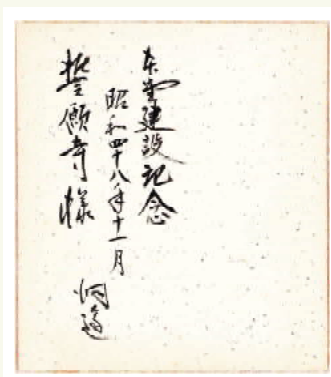


【福岡の徳正寺・故 武内洞達師よりいただいた色紙】



(裏面)

本堂建設記念
昭和四十八年十一月
誓願寺様 洞達



しんらん同人

No.557

7・8
月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺

〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8

【電話】03-3950-7828 【ホームページ】<http://www.seiganji-tokyo.jp/>

われもひかりのうちにあり

誓願寺住職 古賀尚之

私の事務室兼勉強部屋の床や壁紙の傷みが激しくなったので思い切ってリフォームいたしました。

この部屋は、四十三年前・昭和五十二年から一年間、社会人の私が、会社派遣の研修生として、日吉の学校に通った時に勉強部屋として使った場所です。

結婚三年目で三十三歳、長男明徳もこの時・誓願寺居候中に聖母病院で誕生しました。その前後は故政枝坊守が使っていた思い出のこもった部屋です。

リフォームに伴い、棚の奥にあった誓願寺の多くのアルバムを整理したり、福岡から持ってきた書物を改めて見直しながら、誓願寺との縁を感じ、時の流れの速さを思いこれからの生き方を考えさせられました。

嬉しいことに、しばらく目にしていなかった書物が見つかりました。

福岡の故武内洞達師が下さった「ともしび」

奥書には、「心の中に虚偽があってもこれを悲しむ心があれば 真実を求めている 証拠である。

洞達 古賀尚之君」とあります。

書中には、私が書いた、鉛筆での横線や、?マー

クや○印がやたらとついています。二十代、結婚前の若かりし時の自分の心が彷彿と思い出されました。自分が自分だと鎧兜を着てがむしやらに行動していた姿を思い起こしました。

また、暁鳥敏師の「独立者の宣言」も出てきました。暁鳥師は石川県出身のお東のお坊さんで多くの書物も書かれた方です。

この本は、古賀家の菩提寺である、福岡市内の光円寺の故円日成道住職からお借りし、その後は是非にと頂いたものです。最初の「獅子吼」の一節に惹かれ、その後の価値観が大きく変わったものです。

部屋の片付けの手を止め、思い出にふけりながら、福岡での六十七年の人生。上京し誓願寺で過ごした七年半の生活。それぞれ私にとってはかけがえのない時であったと味わせていただきました。

何か物事に直面した時に、あと十年若かったら出来たのに。とあきらめていませんか。十年後から見たら、今がその十年前の時なのです。人間思い立ったら何でも出来ます。今からやりたいことに挑戦してみませんか。コロナなんかには負けないぞ。

合掌

真実なるもの



「聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなり」

このお言葉は親鸞聖人の主著・

教行信証総序の結びの分である。

このお言葉こそ聖人の本心を語られたものと思う。

聞かせていただいたことを喜ぶものである。獲さしめられたことを喜ぶのである。

「真実なるもの」は、人間の頭で考え、人間の手でつかみ取るものではない。真実の法は、何万年何億年の昔から毅然としてあるものである。

この真実の法は、そのままいただくより外はない。

頂くというのは、自覚せしめられると言ってもよいであろう。気付かせられると言えば良いであろうか。自分自身で自覚したり、気付いたりするのではなく「せしめられる」のである。弥陀の本願のまことなる故に、釈尊の説教は真実であり、善導大師の御釋も真実であり、法然の仰せも真実なのである。

釈尊も、善導も、法然も、自らの手で作り出したものではなく、真実の法そのものをではなく、真実の法そのものをいただいてこられたものである。

しかし、真実なるものをいただくということは、容易なことではない。素直に謙虚にいただければよいのであるが、それがなかなか難しい。難しいというのは、真実の法そのものが難しいのではなくて、自我の慢心が、受け取ることを拒むのである。九条武子夫人の歌に「抱かれて ありとも知らずおろかに われ反抗す おおいなる 御手に」とあるが、その心を歌われたものであろう。

驕慢の殻はどうしても自分の力で打ち破ることは出来ない。この殻をそのまま包みとって、殻の力を無意味と知らしめたもうものが、本願力なのである。

本願力に会いぬれば、空しくすぐる人ぞなき、功德の宝海みちみちて、煩惱の濁水へだてなしと賛嘆されるのである。

堅固な驕慢の殻をもった我が、どうして真実の法をいただき、念仏申す身となつたのであろうか。

まことに我ながら不思議である。この不思議を感じるとき、遠く宿縁をよろこばずにはおれない。

長い間のお育てがあつたことに気づかしめられ、獲しめられたのであつた。

ここに云つて、義なき（自己の計らいなき）を、義（他力の本願）とし、自然法爾の洋々たる世界が開かれるのである。

「億劫」を考える

誓願寺 副住職 古賀 明德



6月初旬より東京都の緊急事態宣言が解除され、再び築地本願寺・和田堀廟所にて勤めさせていただいております。自粛期間の間、寺務所も閉めていたため、解除後は毎日のように多くの方が参拝され、法要予約の電話もかかってまいります。自宅待機を2ヵ月ほどしていましたので、久しぶりに外に出て勤めるのはなかなか大変で、恥ずかしながら億劫（おっくう）に感じてしまう時もあります。

もともとこの億劫という言葉は仏教から派生した言葉であり、本来の意味とは異なります。一般的には「面倒くさい」という意味で用いられる「億劫」は、もともと仏教語の「おっくう」がなまったものです。「劫」は仏教では極めて長い時間を表し、「億劫」はその一億倍を意味します。

昔々、法蔵菩薩と言う修行者が、私たちが自分自身の考えに捕らわれてしまう姿をご覧になり、そんな私たちでは、いのちが終わると、この悩みや苦しみが波のように押し寄せる世界（六道）にまた生まれてしまう。なんとかして私がそんな世界から抜け出させてみせると五劫の間お考えになられ、兆載永劫（数えきれないほどの劫年）の間をかけてご修行をされ、私たちを救うために阿弥陀様となって下さいました。

多くの経論には、四十里四方の大きな石を、百年に一度ずつ天女が空から舞い降りて薄い衣でサツとなでて去る、その繰り返しでその石が無くなったとしても劫は尽きない（盤石劫）。四十里四方の城に芥子（アンパンの上の粒々は芥子の実です）を満たし、百年ごとに一粒ずつ取り出しても劫は尽きない（芥子劫）と示されています。

劫を現代学で計算した場合、数百億年と言う数字が出てきます。現在、宇宙ができて138億年と言われているのでそれ以上に長い間ということになります。そんな時間は現実的ではないのではないのか？と思われるかもしれませんが、それだけの時間をかけて考え、ご修行されなければ私たち人間と言う存在は苦しみの世界から救われることはないということを表しているのです。

私たちが億劫に感じる行動は結局自分自身の為であることばかりです。自分自身の為であるのに億劫に感じてしまうのです。しかし、阿弥陀様は私たちを救うため「だけ」にそれほどの年数をおかけくださったのです。

私自身の小ささを改めて知らされるとともに、阿弥陀様のご苦勞を知らされます。でも、そんな私たちであったとしても、今この身の上に阿弥陀様のご苦勞の成果、摂取の光が間違いなく届いているのです。日々の生活の中で億劫に感じることも、面倒に思うことがあっても、「阿弥陀様のご苦勞に比べれば！」と思い、頑張ってみようを思わせていただけます。

合掌

【ご法座等のご案内】

7月より定例法座を再開致します。
三密を避けた日常生活を過ごしましょう。

7月

7・12
(日)

■午前十時～

孟蘭盆会法要【上野隆平師

■正午～

医療相談【佐藤公彦医師

7・19
(日)

■午前十時～

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生まで)

7・26
(日)

■午後一時～

定例法座 祥月命日合同法要

【文殊四郎琢磨師

8月

8・9
(日)

■午前十時～

定例法座【上野隆平師

(※医療相談はお休みです)

8・16
(日)

■午前十時～

なかよしクラブ

(乳幼児から小学生まで)

8・23
(日)

■午後一時～

定例法座 祥月命日合同法要

【山本摂叡師

一言法語

『美わしき人』(「ともしび」より)

その人がらのうちに、幾分かの老人性を含んでいる若い人は頼もしく、青年的な若さを漂わせている老人もまた美しい。若い人のうちにある老人性は、豊かに実った果物を連想させ、老人にただよう若さは精神の清潔さを白わせる。四十代は青春の老年であり、六十代は老年の青春でありたい。若い日に学んだことが、年を取ってから本当にうなずけるようになり、自分の過去に向かってこうべをたれて「これでいいのだ。あれでよかったのだ」と微笑できるような晩年でありたい。

編集後記

・ お寺は、三密を防止しながら活動を再開いたします。
・ ご来寺やお参りの際は、マスクを着用したままで構いません。体調のすぐれない方は、ご無理をされないようにお願いいたします。

・ 外出自粛が解除されたとはいえ、いまだに感染は治まっておられません。日常生活と防疫の両立は難しいけれども、自分で出来る事があります。

・ 「いずれお浄土に生まれるんだ」といえば、現状も一年前も同じことだとも思えるのですが……